

中国調査ノート 8 :

## 安徽省での再びの調査

佐々木 伸 一

### はじめに

本年度は安徽省へと出かけた。2回目の訪問で8月21日から9月2日の期間、移動もあり実際には1週間の調査であった。もう少し長くても良かったのではという思いはあるが、広域調査は大変でこのあたりが限界である。

さて、以前の時にはシャーマンを2例しか見ておらず、その補充のための調査であるが、加えて前々回の調査から意識し始めた死者と身体感のコンテキスト並びに、南北の文化境界（いずれも詳細は後述する）について、実態を見定めること目的として実施した。

ただ、真夏であるにもかかわらず、毎日曇りから小雨といった天気で、気温は低く体力的に楽であったにせよ、空を眺めての出がけの気分が盛り上がらない日々であった。

### 第1章

前回の調査についてまずは簡単に触れておきたい<sup>1)</sup>。1回目の訪問は1999年で、中国大陸についてまだ手探りの段階であった。97年に上海から江蘇省の一部、98年には福建省を厦門から福州までの調査を行ってはいったものの、未だシャーマンをどうしたら見つけられるかわからない状態であった。今では目一杯やれば、1日で5、6件は集めることができるが、青洋と六安の2市で1件ずつの2件だけしか事例を得られなかった。なんと貧弱な成果と今では言えるかもしれない。しかし当時はシャーマンを探すにはまずは何をどうすればいいのか、

看板を出していない彼らの所在を誰に聞けば答えを貰えるのかすら全く分からない中で、結果「2件も」質の良いデータが得られて満足した、こういった事情であった。

この調査状況からシャーマン探しについては、主たる調査項目にすることはできず、福建省で聞いた事情を確かめるためだった。「閔亡」という死者を呼び出すセアンスで明らかにされる、救われない死者の存在。その救済のために、安徽省の九華山や浙江省の普陀山で儀礼を行うことを福建でしばしば耳にした。いずれもシャーマンからで、シャーマンと仏教儀礼がいかにも連動しているかのように語られたからである。その真偽と実態を確認するため安徽省へ行くことにしたのであった<sup>2)</sup>。

九華山では「瑜伽焰口」という死者を救済する「超度」の儀礼を祇園寺で見ることができた<sup>3)</sup>。確かに儀礼は実施されていた。しかしシャーマンから聞いたイメージとは全く異なり、また仏教側の認識も、この儀礼を依頼されればそれをやるだけで、両者が意識的につながるような関係は、何らなかったのである。ただそうはいっても、中国南部一帯で展開される死者の口寄せ「閔亡」や「過陰」というセアンスは、シャーマンという職能者の専門的なものだが、そこから仏教での成仏「超度」へつなげるのだから、仏教側の立場がどうであろうと、それは一つの今のシステムとみなしてよいと思う。

シャーマン側からの仏教へのこういった期待は大きく、文革の中でほぼ壊滅状態であった仏教が、その形式的威容を整えつつあったが中味の充実はまだこれからという事情の中ですら、仏教は多くのシャーマンの拠り所となっていた。以前これについて、政権から迷信とされ逮捕される危険を避ける隠れ蓑といった表現を使っていた。これを否定はできない。ただシャーマンの多くは自分の使命を神から課せられた「救世」、困っている人を救うことであると繰り返し表明する。これすらも自己の行為の言い訳のように聞こえるかもしれない。しかしこれまで数多くのシャーマンに接し、その表明を聞き続けると、その語りには幾分の真実が含まれると思われる。使命を果たすために自己の神の力を信じてはいるのだが、病氣治しや邪気祓いに限定される対処療法的なそれに、や

がて限界を感じるのではないだろうか。毎日、多くの苦悩に関わり続けるシャーマン達は、様々な苦悩の根本、それ自体を解消する思いへと至り、仏教の力を借りる必要に迫られたのではと考えるようになった。経験豊かなシャーマンたちの感覚は鋭敏で、今の世界についての様々な情報や求められるものを聞く中で、たどり着いたのが仏教の凄さであったのではないかと思うのである。実際、仏教に帰依しているシャーマンは多く、さらにその中には「邪気」自体を「救うべき」対象とみなして、「送送」や「押煞」といった不慮の死を遂げた死者霊を、追い出す・押さえつけるという現中国の一般性からかけ離れた死生観を語る者すらかなり出てきているのである。

一方、シャーマンに頼る事情のない人たちは大多数であり、不慮の事態には見舞われたいとはいえず、寿命により自身の祖父母や両親が亡くなっていくのは日常である。では、その霊をどのように慰撫し、子孫を見守る「素敵な先祖」になってもらうかは、彼らの大きな問題と考えてよいと思う。死者への適切な扱いがなければ、それが子孫への禍事へと直結するという観念は、現中国でも極めて根強いものであるからである。例えば宗族システムがあれば、祠堂の中へ祀り上げることでそういった先祖になれる。しかし現在の大都市ではそれは求められない。そのため復興を遂げた仏教は、そこに大きなマーケットを見出し、「水陸法会」など高額な儀礼を整え、様々な方法でその欲求に応えようとしているといえよう。いわゆる宗教の市場経済化と捉えられる都市事情だが、このあたりのことも先に見るシャーマンと仏教の関係に一定の影響を与えていると感じられるのである。

なお、仏教の復興とそこで行われる死者祭祀の現状については、過去へと同じ文脈で遡らせることができるのだろうか。宗教や信仰の在り方自体からではなく、社会関係あるいは個人のイベントを中心に、過去のそれを眺めたらどのように捉えることができるのか。本稿ではそこへ立ち入ることはできないが、近代の「宗教学」を見直す上で、必要な作業の一つではないかと考えている。

個人のイベントからの死者の救済（何か悪いことが起こる⇒死者の求めと判断⇒死者に直接聞く⇒死者の慰霊）は、伝統中国の窓口である台湾ではよりシ

ステマティックに行われていた。台湾には1986年から調査に入り、台南と高雄を主に調査をしていた4)。

台南で何か悪いことが起きると、午前には玉皇宮で童乩（実は女性の乩姨）によるその原因を探る「問神」が行われ、その問題が死者に起因すると判断されると（多分、前もって相互に了解されているのではないと思われる）、午後には嶽帝廟で「乩姨」による死者の口寄せが行われる。乩姨の口を借りた、地獄「枉死城」で苦しんでいるとの死者の語りがあり、そこで午前の様子が確認される。そこから死者を地獄から救い出す「打城」という法事、死者の治療のための「薬王」、そして死者を極楽へと導く「奈河橋」という「科儀」が、毎日、日常茶飯事のように行われていた。もちろんこれだけではなく、バリエーション的な儀礼、たとえば「血湖」というお産で亡くなった女性のための儀礼など様々に展開され、さらに「関三姑」というクライアント自身があの世に行き、死者と直接会うといったものすらもある<sup>5)</sup>。ただいずれもそれは仏教と結びつけられていなかった。

これには理由がある。まず台南では葬送儀礼が烏頭道士によって執り行われることが多い。その中でこういった科儀は、劉によれば「紅頭法」といわれ<sup>6)</sup>、紅頭法師という職能者が仕切るそれは、道教からの派生形の一種で、仏教とは異なる世界に属しているからである。もちろん台湾全体では仏教は健在であり、ではそれと紅頭法との関係のありかたはいかなるものであるのか、こういった問いには残念ながら応えられない。こういった認識が当時は全くなく、加えて葬式やその後の儀礼についても烏頭道士が仕切る、それだけが関心事であったからである。今からすれば料簡の狭い研究でその在り方を問う必要があると強く認識はするが、30歳代でそういった認識があったらとの思いは残る<sup>7)</sup>。

さて台湾は旧中国を色濃く残している場で、大陸でもこういった形がとられていたのではと推測もできよう。ただそれが死者に大きな関心を寄せる南部一帯ですべて同じだったとは考えづらい。なぜかといえば、死者を瑜伽焰口などで超度する、これは中国の各地で見られると言ってよい<sup>8)</sup>。しかしシャーマンから超度へという上記した道筋は、福建でしか聞かれていないからである。

台南の紅頭法師は、福建と台湾の間にある澎湖島では法師というものになっている。両者はほぼ同じと考えてよい。また童乩を操る者は台湾一般で桌頭と称され、紅頭法師と桌頭は類似した存在である。廈門で復活した童乩にも同じような「営下」といった名称で介添え役が出てきており、福建から台湾の閩南世界では民俗宗教慣行が再生されつつある。しかしそれについて何でもありの福建であるにせよ、紅頭法師までといったその全面的なリカバリーはさすがに難しいのであろうか。それには何らかの政治が深く絡んでいるはずである。

閩南というローカルな台湾へ、国民党と密接な関係にあった正一教の張点師も亡命している。儀礼中心で死者儀礼に大きな関心を寄せる正一教は、それまでの台湾のローカルな世界とも親和性があり、そこから葬式を司る烏頭道士や、ローカルな紅頭法師も、そこで一定の地位を獲得するようになったのではないかと考えている。鈴木によれば様々な職能者が百花繚乱していたのが旧中国のようであった<sup>9)</sup>。そこへの張天師の亡命により、事情の再編がなされたのではないかと考えている。ただこれは推測でしかない。なぜならそれ以前の出来事として日本の台湾領有化がまずあり、そこでの迷信撲滅という明治政府の試みなどの事情後の話で、このあたりの経緯はほとんど明らかにされていないからである。

紅頭法師について、何でもありの福建の宗教局はどのように考えたのだろうか。台南西羅殿などの童乩を受け入れた人々は当時どのように思ったのか。大陸への進香団を組織した台湾の彼らは、当然のこととして紅頭法師も帯同したはずだからである。ただ、そこには常に政治が絡んでくる。北京から発信される政治性へと、地方の宗教局がどのようにコミットするかは大きな問題である。そういった地方の事情のなかで、使えるものが仏教しかなかったのだろうか。道教も一部復活しているものの、その影響は極めて限定されており、シャーマン達は結果として仏教へと向かったと思うのである。私がそういった現場にたまたま居合わせたということだが、このあたりは現中国で状況的に形作られる、宗教的日常性についての一場面と考えている。

死者供養は中国全体でますます盛んになりつつある。その基本となる考えが

浮かばれない死者への恐怖であり、たとえ身内、親や祖父母であっても適切な扱いがなされなければ、それは子孫に警告として日常の生活に「不順」をもたららし、不幸な結果がそこに予想される。身内以外の死者である「野鬼」「死鬼」は、人々にとって恐怖の対象でしかない。それには「邪気」という名前が付けられ、それが引き起こす様々の身体的事象について、シャーマンによれば「外科」や「虚病」などと判断されている。

その原因を、現状の不順の焦点とする死者に直接問いただすという行為は、中国の南部、より限定するならば淮河あたりまでである。以前は長江の北部という感じで押さえたが、南北の境界は極めて明瞭であることが判明している。実際に南北文化の境界は淮河であるという語りはあり、それを橋というシンボルで示すという試みが淮南市で進められていた<sup>10)</sup>。

以前、江蘇省を踏査したときに、その事実に出会った。南通市という上海からさほど遠くない場所では、神は道教・仏教で語られるそれであった。ところがその北の塩城市に入ると事情は一変する。全て「仙」になるのである。では仙とは何かと聞くと、シャーマンは恥ずかしがりながらも「キツネ」という語りがなされ、そこに北方世界への境界線が引かれていることに気づかされた。その北の連雲港市では、死者を呼び出す儀礼は一切聞かれなくなった。この調査で連雲港市の南の淮安市が南北境界の北限であることを確認し、また南限は塩城、ここが南北境界の重複する地域であることを確認できた。この調査はつらかった。毎日2百キロ近くの東西南北への移動を当たり前としたからだった<sup>11)</sup>。

この事情を安徽省で確かめること、それがこの調査の目的の一つであった。結果として江蘇省で明確になったそれが、内陸の安徽省にもつながっていることを確認できた。南北の文化境界はさらに奥地へとつながっているのであろう。

さて上記について、下記2章の調査データでは宿州市と、蠔埠市の境界の固陳県、ここらあたりに線引きができるのでと考える。固陳で聞いた過陰についての話が、宿州では一切聞かれなくなるからである。数例の事例からでそういった判断をしてよいかという疑問を感じられるかもしれない。また実際に見たのかという批判もあると思う。どちらももっともな見解で否定はしない。ただ何

年か前から気づいていたのは、シャーマンは何でもできるというのである。ではやってみてと頼むと様々な理由をつけて結局はしない。こういったシャーマンの特性、商売柄でやむを得ないのかもしれないが、クライアントのニーズに常に応えようとする姿勢がそうさせているのである。この点から実際に見なければという指摘は実に正しい。私の先生からも常に言われていたことで、それを無視することはできない。ただ適切なクライアントがいなければそれは難しく、この問題を回避するための手段として、地元情報を収集することを常に心がけてきた。それが様々な人と会話する機会が多い、白タクや三輪の運転手からの情報なのである。もちろん彼らのそれは思い込みや、又聞きで当てにならないものも多い。ただ彼らは「ないものがある」とは言わない。話を面白おもしろくするために法螺を吹くかもしれないが、わざわざ嘘をつく必要は全くないからである。シャーマンと運転手の情報属性はそういった面で異なり、両者を見比べることにより、地域事情の大まかなあり方を把握できるのである。これに加え地元の人々の情報も多くは様々な噂話で、核心を突くものは限られるが、両者を理解するための貴重な追加情報源となっている。

では南通のような南限はどこにあるのか。仙が神に代わる地点である。南通で明らかになったそれを、安徽省では残念ながら確認するまでに至らなかった。以前の調査での、北大仙や三仙姑という安徽省での語りについては、「仙」と見なしてよいと思う。三仙姑が丘のところにて付いてきた。今考える限りだが、それはキツネの世界で、安徽省全体でもそれが一般と理解するべきではないのかと思っはいる。では南限はどこかという、これは推測だが東では南京以北、南では浙江省の境界あたりまでつながっているのではと思う。このあたりあやふやなことを承知の上で受け取ってもらえればよいと考える。なぜなら南北境界についての論自体が今ではほとんど語られず、その意味を失ったものでしかないからである。

ただ景観的には、高铁に乗るとこのあたりの理解はたやすい。飛行機ではわからない地上の把握が簡単なのである。降水量が1,000mmといった南北境界論よりはるかにわかりやすい。米からトウモロコシへと南から北へと風景が全く

変わる。3百キ<sub>ロ</sub>の速度は中国の事情を視認するための凄い装置だと思う。

江蘇省で見た南北境界が内陸へとつながるのを確認できたのは成果であるにせよ、中国の現代の政治で意味を持ちうるのかといえ、今それは数多く試みられる地方振興政策の一つ程度でしかない。中華文明という語りの中で漢族という一体感を作り上げようとしている現政権においては、このことはむしろ無視すべき要素でしかないと感じている。

この調査のもう一つの目的はシャーマン事例の補充と、セアンスの現場における「身体感のコンテキスト」である。このシリーズの6、7で述べたように<sup>12)</sup>、以前私が汕頭のホテルで体感した事実をシャーマンに告げると、かなりの割合で死者が原因と判断され、特定の身体感、心臓がドキドキ、毛が逆立つといったものを死者と結びつけるコンテキストがあることを、昨年 of 東北部の調査で確認した。安徽省ではどうかということで、同様の調査を実施した。私がクライアントとなり「体感」を告げ判断を仰ぐセアンスを行ってもらったものである。2章で《体感》と記述した事例である。結果から言えば事例数は全部で13件、そのうちセアンスを行えたものが6件、うち4件、2、11、12、13で死者が関与していると判断され、3は先祖、7魂が落ちている、このような結果となった。66%だからこのコンテキストはあると言ってもよいが、事例が少ないので、そういった傾向は見受けられる程度としておいた方が無難であろう。

適切に祀られない死者があちこちに山ほどおり、「死鬼」や「野鬼」あるいは「邪気」と名付けられるそれは、人々に禍をなすものという考えが、今でも中国の基本であれば、上記コンテキストがあっても当然であろう。この体感については、たとえば墓や葬儀場などに対する恐怖感での感じ方と同じで、冗談にもお化けの話をしない彼らの日常を見聞きするなかで、こういった理解をしてもいいと思う。もちろん近年ではそれが徐々に変わりつつあることは確かである。その例の一つとして、死者の商品化であるお化け屋敷が、人々のアトラクションになり始めているからである。ただ未だそれは一部に過ぎず、シャーマンは特定の身体的感覚状況を死者霊一般へと還元するコンテキストを、クライアントと共有しているとみなしてよいだろう。

## 第2章

これまでと同様に以下では、調査の具体的状況とシャーマン事例を、現地事情を交えながら継時的に述べることにする。その意義については割愛する。今回もS先生にご同行頂いた。心からの感謝をささげる次第である。

8月25日（月）、自宅から関西空港へ、12時40分の便で上海浦東空港へ定時着。S先生と待ち合わせタクシーで虹橋駅へ、高鉄16時52分に乗る。合肥駅に定時前に着くもタクシー乗り場がすごい行列で、宿へは20時半過ぎ、考えていたより1時間も遅かった。さらにグーグルメールがつかならずショック。

8月26日（火）、小雨、9時半に新華書店へでかけ地図を買う。肥東県へバス。途中で乗り換え宣城へ、11時過ぎであった。三輪車・タクシーに聞くと知らない、次の三輪車は「耶蘇」キリスト教を信じているから関わりたくはない。以前は信じていたが、今は耶蘇だけという。宣城は耶蘇が多いと聞く。さらに別の三輪車に聞きS村へ行く。仙姑というそうである。

### 【1】、女性、50代、仙姑

家がわからないので近所の人に聞く。仙姑をやっているのは私の次の代の人で、嫁に来てあの家の先祖の霊「S姑奶奶」がついた。家ではやらず香堂でやっている。客は朝7時ごろから来て待っている。午後はやらない。食事をとるとやらなくなる。大学受験についてのことや病氣治しをする。「代亡魂」とは死んだ人を呼ぶ儀礼である。30歳前後からやっている。これを聞いた夫婦もS一族。

麻雀をやっていた本人に道で会う。他の人とは違って私は午後はやらない、料金も10元しかとらないと言い立ち去る。

香堂へ行ってみる。前は爆竹の紙で真っ赤になっている。中には神像が2体、軸子がかなりかかっている。帰り際に道で村人に聞いていると、さらに何人かが集まってきた。「代亡魂」については確かにある。S老人は実際に見たそうだ。ただあの仙姑はやらないという。彼女の子供は3人で皆出稼ぎに出ているそうだ。その人たちから明日の朝来てくださいねといわれた。本人の家を見に

行く。

バスで梁園鎮へ。13時半なのでまずはご飯。店の人に聞くが知らないという。小雨、道路沿いに停まっていた三輪に聞くも知らないといわれ、バスで八斗鎮へ。軽四の男性に聞くとW村にいるというので行く。1軒目は留守で畑仕事中であった。女性、仙姑「焼香的」ともいう。遠くに姿が見えるが、誰も呼びに行ってくれそうになく、自分たちで道のない泥だらけの藪を越えて行きたくないでここはパスする。車に乗って他にはないのかと聞くと、もう1軒あると運転手が言い出す。母の兄弟の妻だそうである。

## 【2】、女性、78歳、仙姑

《身体感》儀礼をやってもら。「線香をここであげたい。それから聞きたいことがある」という頼み方であった。それでまず線香を香堂であげてきてくれと言われる。線香は持っているのか、持っていないというと香堂にあるからと、線香をあげに行く。黄大仙、黄三仙姑、金姑娘、胡三仙の神像が祀ってある。キツネ・イタチであると運転手も認める。

戻ってこちらでもろうそくをつけ線香を立てる。身体感の状態を話すと「悪霊にあたった。悪いものにあたった。邪霊かな」という。脈をとる。年齢・八字を聞かれる。符を書いてくれる。左手親指の付け根に針を立てる。これは二の針で銀製だから細菌感染はないという（やられる身としてはとても怖い）。符を6か月間身に付けておきなさい。前垂れのようにしておくのがいい。胸ポケットでもいい。とにかくいつも持ち歩けばそれでもよい。「代亡魂」という言葉はあるという。16時半まで。

帰り車のタクシー（安い）で合肥着18時。そこからタクシーで宿へ18時20分着。19時に外でご飯。安徽省おすすめ4品など蒸し料理系など。20時過ぎに戻り今日の記録。

8月27日（水）、小雨、9時半にタクシーで肥西県へ。10時12分着、こころは廻りは耶蘇が多く、そういったものを信じている人が少なくなっていると聞かされ、さらにここから10キロ先までは開発区で、もっと西に行かなければ農村はないよと言われる。このためバスで花崗鎮へ11時過ぎ着。最初に聞いた軽四

でいく。E村。

【3】、女性、50代、大神、依頼者あり

小学校は3年まで。18歳の時に信仰するようになり、20歳でこの家に嫁に来た。自分の母が「張三姐」を長くやっていた。36歳の時、母が亡くなると受け継いでやっている。その前には、母と二人であたりかまわず騒ぎまわっていた。夜昼二人で唄っていた。母が死んでから「案」を作ってやり始めた。人の病気を看てあげるとちゃんと治る。午後はやらない。張三姐の由来はわかっていない。家族は反対しない。夫はGという姓だが、やらないと騒ぎ暴れるから、仕方なくやらせるしかない。

1 件目、中年の女性と若い男性、小さな子供、夜泣きをする。原因は祖母の夫が44歳の時に死亡、孫をかわいがりたくて付いてきた。「送送」すればよい。子供の頭のまわりに線香をめぐらす。いわゆる「収驚」である。

2 件目、老女、中年女性、若い女性。若い女性の子供の頭に出来物ができた。宴会をやっている最中にこの子が倒れ気を失った。舒城の病院ではだめだと思い合肥の病院へ行った。入院したがやがて意識が戻り話せるようになった（これと次との経緯はわからない）。

中年女性の夫は出稼ぎに行きたくなかったが、彼女に強く言われしぶしぶ出かけた。現地から中秋節には帰りたいと電話してきたが、もう少して刈り入れになるのでそれまで働いていなさいということにさせられた。しかしその間に酒に酔って交通事故に遭い死亡した。この女性は再婚することになったが、子供の姓をどれにするかという相談で、死者に聞いてみることになった。神が唄いながら言うには、中年女性の死んだ夫が新しい父親の姓にしろと言っているという（「代陰談」）。老女は、杭州に出稼ぎに行くという話ができ子供を行かせたいがどんなものかと尋ねる。神は本人に任せなさいと唄う。

左手でリズムをとり、時折茶を飲みながら、唄いながら依頼者と問答をする。死者とのやり取りは、3人称で彼がそう言っているという形で唄われている。《身体感》儀礼をやってもら。老祖（先祖）の霊が付いてきているからだ。遠いところへ出かけ何か起きるといけないから、保護のためにやってきた。

「代陰談」のほかに附身して話すのではないかと聞くと、それは「代亡魂」だという。これを皆知っていた。ただやっているかどうかはわからないそうである。12時過ぎまで（午後はやらない）。

鎮に戻りバスで、六安市舒城県城へ13時過ぎ。昼ごはんは定食系のきれいな店。タクシーなど何台かに聞くがなかなか難しい。三輪車でI村、1軒目は留守。2軒目へ。

#### 【4】、女性、70代、大神

昔は貧しく、ご飯も十分に食べることができなかった。仏教を信じており帰依している。これは舒城の寺で行ってもらった。九華山へもお参りに行ったことがある。皆の寄付で廟を立てた。自分の家がぼろぼろの状態なのでそれを廟にした。神は観音である。念仏会のようなものを行っている。専門は「查花樹」で子供が生まれぬ相談を受ける。

これではどうしようもないと思ったが、とりあえずは儀礼に取り掛かってもらう。線香を竈や「天地」など計6カ所に立て、たばこを10本供える。煙草を吸う菩薩だからだそうである。儀礼をやりかかると案の定、60歳を過ぎているとわかり子供などは無理ということになり、儀礼は終わる。

県城に戻り「大神」が廟を建てているという話を聞きタクシーで観音寺へ。Rという女性が皆からお金を集めて作った。夫と二人で2001年から管理している。釈法月と名乗っている。代亡魂については知らないという。運転手によればもう1軒あるというので行って見る。竜王禅寺という寺だが、こちらは行政が関与しているようであるが、閉まっておりますよくわからない。

17時20分に戻る。舒城からバスで合肥南駅へ。タクシーで宿へ戻り、外でご飯、牛肉のおこげ、初めて見る。帰って今日のおさらいと記録、期間が短いので明日は淮南市へ移動と決める。

8月28日（木）小雨、9時半にチェックアウト、タクシーで合肥駅へ。10時50分の高鉄で淮南へ11時半着、タクシーで古陽国際大酒店へ。まずはお昼ご飯、13時過ぎにタクシーで上窯鎮へ20分ほどかかる。三輪に聞くと邪病「外科」を看る大仙がいるという。40分ほどの悪い道を行く。K村。

【5】、R、女性、50代、R大仙と言われているが伝統的漢方医

自分は医者で家伝の漢方をやっている。父も医者で代々漢方医をしている。「外科」もやる（これについて漢方なのか仙なのか判然としない）。このへんは胡信仰があり、近くに三姐という女性がいた。これは胡仙であったがもう亡くなった。

依頼者は3人の若い女性。一人は胃の病気で何度も来ている。いずれにも漢方薬を処方していた。

1時間ほどいて鎮へ戻る。16時、寿衣店で60代くらいの女性に聞くと、「代亡魂」は知っている。懐蓮にやっている人がいる。ここには大仙を信じている人がいる。隣の店の女性二人が会話に加わり、代亡魂、それはカン魂ではないかという（カンの漢字はわからないそうである）。

三輪車で悪路に乗り疲れたので帰ることに。白タクではいろいろ話が聞けた上に30元は安い。宿まで行く。

運転手の話、仙家はいる。皆腕に覚えがあって、そうでなければやれない。依頼者の家の門はどちらを向いているか、庭にどんな木があるか、家の中にも何があるかを言い当てる。蠅埠で大学城を建設の時、古い家を壊していったが大仙の家だけが残った。これを壊しに行くと、屋根に大きな蟒蛇がいた。工事の人達はびっくりして皆逃げ出してしまった。

自分の友達が杭州へ出稼ぎに行き、女性を連れて帰って結婚した。四川省の彼女の実家へ挨拶に行った。1か月ほど音信がなく心配して大仙に看てもらった。すると心配することはない。2、3日の内に連絡させるから、安心して帰りなさいと言われた。実際、次の日に連絡があった。

ある年寄り、夜道を帰る途中、自分の古い家にイタチが集まっているのを見た。石ころを投げつけて追っ払った。しばらくして彼の息子が狂って、刀で切りつけようとした。訳を聞くと会議を邪魔したからだという。病院に行っても治らないから、大仙に連れて行くとまともになった。すると今度は娘が、あなたには勝てなくても息子や娘には勝てるよと言い放ちながら暴れまわるようになった。

カン魂は「観魂」だそうである。観魂は実際に見たことがある。親戚の人が依頼者で、懐蓮へ自分の車で行った。実際、恐ろしくて身の毛のよだつようだった。

情報の整理を18時15分まで。日誌作成。19時外へご飯。町を見学、ベルトとお菓子を買う。

8月29日（金）、9時半に古溝鎮へ。タクシーで35分くらい。軽四で行くがだいふ戻る形になる。平圩鎮あたりであろう。

#### 【6】、Y、男性、40歳、大仙

依頼者がいるが（赤ん坊連れの家族、夫婦）終わったところだった。初めに線香を買わせる。少し話を聞く。華東医学大学卒（淮南市）であり病院で3年勤めた。病院をやめてこのような仕事を始めた。これは仙が呼んだからで、自分にはそういう縁があるからで、そのあたりのことは複雑で長い話になる。

仙によって病気を看ることができる。いろいろな仙がやってくるが、これが主というものはない。午前中しかやらない。代亡魂は知っているが、やる人はほとんどいない。仙家を信じる者はいるけれど、人騙しも多い。だから自分はこの世界では特殊な存在である。

もう一軒行く。先のところからかなり遠い。来溝鎮近辺だと思う。

#### 【7】、女性、大仙

母娘でやっている。母は79歳、娘は他の村に嫁に行っている。陳大仙、陳仙、観音、財神を祀っている。陳は代々家に伝わっている。大仙はおおよそキツネかと聞くと皆うなずく。

《身体感》儀礼をやってもらう。魂が落ちたからで、魂を呼び戻す儀礼をする。母親が脈をとる。年齢、干支、妻の年齢、状況を説明させ判断する。「拔火缶」をする。まず針を指の関節に当て、次に貼り薬を背中に、吸い玉で胸や背中を吸わせる。線香に赤い紙をちぎってつけて、名前を呼んで、もうおびえる必要はない、怖がることはないと言い、ほんの窪、肩、肘、膝に当てていく。

「代亡魂」は知っている。「観魂」はわからない。あまりやる人はいない。なお、後から来た若い親戚たち？はだれも知らなかった。

鎮に戻ると12時10分、バスで潘州区へ。20分ほどでついてお昼ごはん。何台かの軽四に聞くと皆遠いところばかりであり（遠いとお金になる）、比較的近そうなところへ行ってくれる車を探す、それでも悪路を40分ほどであった。G村。行くと本人は不在で、草刈りですぐに帰ってくると言うので、しばらく待つ。

【8】、男性、50歳、大仙、仙も神も祀っていない

農機具の修理をやっている。神・仙・代亡魂などさっぱりわからない。子供の夜泣きだけをやっている。これは人から習った。

3組の母と幼児の依頼者がやってくる。男性が戻ってくる。いずれも子供の夜泣き。儀礼はごく簡単で、子供の脈をとって頭を撫でまわすだけである。お礼はたばこ1箱。5元程度のもの。

区へ戻ると15時半で、三輪に聞くと区のはずれに女性がいるというので行ってみる。数分程度、行くと即断られる。女性で家の中には祭壇が設けられていた。他の三輪車に聞くと午後はやらないよと教えられた。15時50分なのでバスで芦集へ。男性がいると聞き三輪に乗るが途中でエンストしてしまいどうしようもない。16時半なのであきらめて車を乗り換えて潘州区へ戻る。帰りタクシーで淮南へ戻る。18時前なのでまずは今日のおさらいと明日の予定決め、宿州市の宿をとる。

今日はあまり良い日ではなかった。エンストに加え宿の鍵は開かず、ネットは不通となる。19時外でご飯。戻ってから交通手段を検討するがこれが意外に難しい。やむなく淮南駅へ21時半に行ってみる。しかし駅員などにいろいろ聞いてみても要領を得ない。宿へ戻りネットで再度チャレンジして、淮南東から蠶埠、蠶埠から宿州、と別々に買うことで一件落着。蠶埠が南北の鉄道区の境界になっているようである。すでに22時半疲れた。

8月30日（土）、8時半にご飯。昨日できなかつた日誌の作成。雨なので10時半から地下街を見学。綺麗な洋服屋さんが延々と連なる。これがかの安徽省・中国内陸部とはとても思えない。

12時にチェックアウト。淮南東駅へタクシー。駅で昼ごはん。13時50分の高

鉄で蠓埠南駅へ。待ち時間をお茶。15時10分発で宿州南駅へ31分で着。ぼったくりタクシーが跋扈していて辟易する。最近では珍しい。やはり安徽省は田舎であった。バスで行こうとするとメーターで行くというタクシーが現れ乗る。おしゃべりおばさんで、自分の家に荷物をついでのように届け、ガソリンスタンドに立ち寄り、それでもかなりぼられた。一休みしてから街中を見学、そのまま晩ごはん。20時過ぎに宿へ戻り帰りの高鉄予約をするがうまくできない。やむなく駅に行く。大雨だったが無事切符を買い宿に戻ると22時前。この半日は何だったのか。

8月31日（日）、9時半タクシーで桃園県へ。10時過ぎに着く。市場を見て回るが乗り物に出くわさない。道端で少し話を聞く。バスを待っているおじさんは宿州市の街はずれにいるという。ここの人達はキツネやイタチとかの仙を信じている。ただ「外科」の人はいるにはいるがどこにいるかはわからない。死者の霊を呼ぶというような話は聞いたことがないそうである。

見切りをつけてバスで祁県へ。11時10分、何台かの三輪に聞くが適切なものはない。女性の三輪が近くにいるというので行く。5分ほどのC新村、いわゆる新農村（農民の生活改善のため、新しい村を作り同型のコンクリートの家を建て住ませる政策）である。行ってみると家の前で、麦わらで蒸し器のふたを作っていた。

### 【9】、女性、58歳、大仙

古い家からここに移住してきた。18歳の時にここに嫁に来た。四川省南充というところからきた。親も身寄りもない。四川省では米を食べていたが、ここでは麦やトウモロコシだけだった。夫とも仲がうまくいかず何度も自殺しようとした。仙家に死ぬことはないと言われ、仙家の「根」があるから仙家に仕えろと誘われた。30歳の時に「案」を作ってもらった。30年近くやっている。自分は子供の夜泣きくらいしかやっていない。

家の外で聞いていたが、祭壇を見せてほしいと頼んだが断られた。依頼者からのお礼の軸子はたくさんあるがここには掛けていないという。

勉強をしていないから字は読めない。子供は3人で皆自立して暮らしている。

今は夫とも仲良くて難関を越えた。

儀礼をやらしてもらおうとするが大丈夫と言われ、インタビューのみであったが途中から白大仙となって唄いだす。

「仙を信じる人は悪いことはしない。今の世の中は乱れて悪いことが大変多い。私、白大仙は世のためにやっている。毛沢東は悪い、良い人も悪い人もまとめてやっつけた（ここで覚める）」。いろんな仙が来る。死んだ人の話はわからない。白大仙とは後で運転手からウサギだと教えてもらう。

12時過ぎ、夏のはずなのに吹きさらしで寒くなった。県城へ歩いて戻る。まずは昼ご飯。13時20分改めて女性の三輪車に聞く。少し遠いところ、昼を過ぎたらやらないそうだがとりあえず行ってみる。道が悪いので途中から歩くことになるが、あまりの泥道でその家にたどり着けず、家の手前で出てきた男性に話を聞くことになった。

#### 【10】、C、男性、82歳、大仙

1949年からやっている。学校へは行っていないが、私塾で勉強をした。大仙と呼ばれている。胡仙、黄仙、どんな仙でもやってくる。勤めたことはなくずっと農民である。人に習ってできるようになったが、大した邪病治しはしていない。子供の夜泣きくらいしかやっていない。死者の霊を呼ぶことはこの地方ではやらない。このあたりでは午後は看ないのが一般的だ。

県城に戻りバスで永鎮鎮へ行くが、軽四に聞くと昼からはやってないのでといわれてしまい、バスで戻り市街地の手前の村で降りる。自動車学校があったが乗物は無い。これを探せないと全く仕事にならないので、あきらめてバスで宿へ戻る。16時40分。靴磨きをしてから今日のおさらいを17時20分まで。お休みをして19時に外へご飯。串焼きを食べる。ここではセミの蛹を食べるようである。宿へ戻り記録をつける。

9月1日（月）、8時半朝ごはん、ほとんど何もない。9時半に出かける。昨日、死者の霊を呼ぶことがないのを確認できたので、それではどのあたりに南北境界があるかを確かめるため、思い切って蠓埠市固鎮県まで南下する。バスセンターに行くつもりが都合よく固鎮行のバスが来る。固鎮に10時半。男性

の三輪で行く。Y鎮D村、車が汚れるからと途中から歩かせられる。おかげで足は泥々になる。

【11】、C、女性、53歳、大仙

仙が来る前には心身は大変な状態だった。始めてから17、8年になる。死者を呼ぶことはない（運転手がやるといっていたが、信憑性に欠ける）。胡仙である。

まず氷砂糖を一粒与えてなめさせる。ろうそくに火をつける。クライアントは赤ん坊が3人とその家族3組、子供が夜に熱を出して、病院で何日も点滴をしており、ここにやってきた。線香を頭の周りをめぐらすだけという簡単なもの。3人とも全く同じ儀礼であった。

《身体感》儀礼をやってもらう。40代男性の野鬼が付いたからそういう状態になった。野鬼はあちこちを漂っており、人に付くからだ。

お礼に10元渡すと、5元をおつりとしてくれた。これは初めての経験であった。帰り道はクライアントの三輪車に乗せてもらい助かる。県城へ戻り、12時近くだがもう1軒へ行く。県城のはずれである。

【12】、男性、65歳、大仙

病気で18年間何も仕事ができない状態だった。勉強はしたことがない。この仕事は30年間やっている。仙は胡仙である。最近是他の仙についてあまり言われなくなり、一般に大仙と称するようになっている。「白」はもともとはなかった。

《身体感》儀礼をやってもらうが、線香とたばこを買ってくるよう言われ、近くの店で買い求める。線香2束（3元×2）、たばこ（5元×2）、儀礼は簡単なもの。身体感を聞き、脈をとる。指先に爪を立ててみる。脈から中性脂肪の問題と胆のうが悪い。これが実際の病気で、他に「外科」もあるという。泊まったホテルの部屋で人が死んでその霊が残っている。これが原因だ。背中を上から下へ、次に下から上へと両手で何かを抜き出すような動作で触れていく。これで死者の霊はなくなったといわれる。

13時前で昼ごはん。13時40分乗合のタクシーで、曹老集鎮へ。14時20分くら

い。軽四で行く。途中、死んだ人については家で壇を作ってやるか、お墓ですると聞く。N村。

【13】、女性、61歳、仙家

30数年やっている。字は読めない。仙を祀るのは1日と15日だけで、線香を立てる。自分の場合、何も知らないうちに仙がやってきた。自分の仙は上海にもよく行く。胡仙である。死んだ人についてもするという。それは「観魂」なのかと尋ねるとなずいた。

クライアントがおり、赤ん坊と女性が2組、夜泣きだそうである。ろうそくに火をつけ、前事例と同じく線香を使う簡単な儀礼。5元を払う。

《身体感》儀礼をやってもら。まず脈をとり、頭、額、こめかみを手で軽く触れていく。交通事故で車に轢かれて死んだ野鬼が付いたからである。私のもとに来ればもう大丈夫と言われた。20元をあげたら喜んだ。これで今回の調査は終了。15時半。

バスで蠶埠市駅へ。降りるところを間違え1つバス停を乗り過ごす。14時丁度。ちょっとお茶をして16時51分の鉄道で宿州市へ18時20分着。宿まで歩いて帰る。19時10分ホテルでご飯。外とあまり変わらず。調査の振り返りをする。

9月2日(火)、11時31分高鉄で上海へ。13時40分紅橋着、14時のバスで浦東には15時着、すぐにチェックインしS先生と別れる。あとは長い待ち時間。両替、入り口の案内所でWi-Fiナンバーを貰い、ネットのニュースで暇つぶし。17時40分に乗るが飛び立ったのは19時15分。家に着いたのはやっぱり0時過ぎだった。

この調査を終えて、追記すべきことはほとんどないと考えるが、前節で述べたように、南北境界については政治的に意味を既に失っている。このことは文化とは一体何かという大きな問題を提起する。過去には意味あると取り上げられていたそれを語る人が、いまは地元だけでしかない。近代に生成された「文化」概念自体が、ポリティクスの視点により作り上げられ、問題はモダン的思考からではその限界が見えてこないことなのである。こういった点については稿を改めて述べたい。

身体感のコンテクストについては、多分上記した解釈でよいと思う。ただ、中国社会では新たな動きが胎動しているようである。お化け屋敷の件だけではなく、「送り人」という映画を見た香港での事情を追う阪大の宮原氏からの情報だが、救われない先祖ではなく、十分な慰撫を受けあの世へ旅立つ死者という、新たな発想が生まれ始めているらしい。こういった事情と本土での死者供養が連動するとどうなるのだろうか。

なお、シャーマン事例補充では、自宅以外に壇を作る事例、「案」を設ける、習って覚える（これは2例目で希少である）、これに加え医者がシャーマンになる、伝統漢方薬を作る人の属性など面白い事例を得ることができた。今後も中国の多様性と現在進行形のそれを、見据えていく必要があると考えるが、それは近代の宗教概念に頼らない研究へと移行したものになるろう。

## 注

- 1) 調査状況の詳細については、拙著、2002を参照
- 2) 調査状況の詳細については、拙著、2001を参照
- 3) 瑜伽焰口については、鎌田、1986、を参照
- 4) 拙著、1990
- 5) 拙著、1996
- 6) 劉枝萬、1978
- 7) これについては、自身の中国のシャーマン研究でもまったく同じで、分類学的蝶々集めというモダンの発想でしかそれをしてこなかったことに、大きな悔いが残る。
- 8) あちこちの省で寺を訪ね、流通処で『瑜伽焰口』の科儀書を求めるついでに、実施されているかを尋ねると、おおよそで行われていた。なお鎌田の研究での科儀書は天寧寺版であり、祇園寺も同様であったが、他に上海書局版などがあることがわかった。内容についてはほぼ同じである。
- 9) 鈴木、1934
- 10) <http://www.recordchina.co.jp/a23329.html>、2014.12.10
- 11) 詳細については拙著、2009を参照。
- 12) 拙著、2013、2014

## 引用・参考文献

- 鈴木清一郎『臺灣舊慣冠婚葬祭と年中行事』、臺灣日日新報社 1934 台北  
劉枝萬「台湾のシャーマニズム」桜井徳太郎編『シャーマニズムの世界』1978 春秋社  
拙著「牽亡を行なう女性達 -台湾南部のシャーマンの職能者に関する事例報告-」  
『大阪明浄女子短期大学紀要』5号 1990

- 「死者と会う儀礼“閔三姑”―事例報告とシャーマニズムの観点からの考察―」  
『大阪明浄女子短期大学紀要』10号 1996
- 「中国調査ノート1：中国上海・江蘇・福建のシャーマン記録」『環日本研究・資料編』6、環日本研究会 京都外国語大学 2001
- 「中国調査ノート2：中国中原の宗教的職能者」『環日本研究・資料編』7  
環日本研究会 京都外国語大学 2002
- 「中国調査ノート4：蘇北・蘭州の民俗宗教事情」『無差』16号 2009
- 「中国調査ノート6：中国漢人シャーマンのまとめとして」『無差』20号 2013
- 「中国調査ノート7：中国東北部の民間宗教的職能者」『無差』21号 2014

